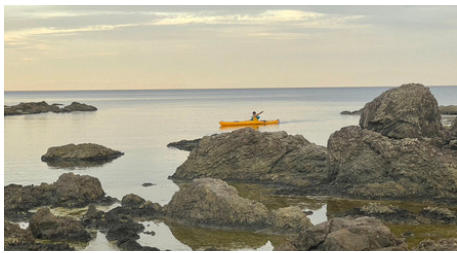


飛島の海でカヌー体験

飛島の中村地区漁業代表のご厚意により、飛島小中学校に保管されていたカヌーをお借りし、センター前の海辺でカヌーを漕ぐ機会を得ました。

飛び跳ねる小魚たちや青く澄んだ海の美しい景色が目に飛び込んできて、その光景に心が癒されました。体全体で自然との一体感を味わうことができ、都会や本土では体験できない特別な時間を過ごすことができました。



↑ 飛島の海をカヌーで漕ぐ様子



↑ 飛島の海水浴場で私が自然を感じている様子

書や映画鑑賞に熱中する時間が持てたのは嬉しいことでした。朝早くから聞こえる鳥のさえずり、夕方の静けさ、そして夜の波の音。都会では感じることのなかった自然のリズムがここでは否応なく存在し、特別な時間を今も感じています。

飛島での生活の不便さは、私が当たり前だと思っていたサービスや物事を見直すきっかけとなりました。都会では、自分と同年の人を見かけては勝手に比べて落ち込んだり、SNSでの比較に悩まされることが多かったですが、ここではあえて不便で何もない環境に身を置くことで、心の余裕を持つことができました。

人口の少ない場所では、他の人との距離が近く、より深い人間関係を築く機会があります。地域の人々との絆を深めることで、支え合いや協力の大切さを学びました。新宿の都会生活と、平均年齢70歳以上の離島での生活という真逆の環境で過ごすことで、何が本当に重要で、何が不必要なのかを考え直す良い機会となり、自分にとって本当に大切なものを見つめ直すことができました。

人間関係においても、島の人々はとても親切で、9カ月も経つと会う人会う人が知り合いであり、私という存在が認知・肯定されていることに安心感を覚えます。離島や田舎暮らしには確かにチャレンジもありますが、その分だけ得られるものも大きいです。日常の小さな幸せを見つけ、自然と共生し、人との絆を深める。このような素晴らしい経験が、ここ飛島での日々にはたくさん詰まっています。離島や田舎暮らしを考えている方には、ぜひ一度、その魅力を体験してみしてほしいと思います。

方言ワンダーランド

東京から飛島に来て、9ヶ月が経ちましたが、なまりにはまだまだ苦戦しています。聞き慣れない言葉を耳にすると、これがなまりなのか、方言なのか、識別が難しいです。

今月覚えた方言は『けー』と『くー』です。それぞれ『食べなさい』と『食べる』という意味です。文字数が短いため覚えやすいものの、元の意味で使われる発音と大きく異なるため、いざ使われるとまだすぐには理解できず、戸惑うこともあります。

Tobishima 協力隊通信 令和6年 9月

飛島での9カ月 を振り返って

飛島での生活を振り返ると、当初の予想を超えることが多々あり、刺激的な日々を送ることができました。離島暮らしは娯楽が少なく、若い人も少ないですが、そのおかげで趣味の読